

死 界 と 闇

——D・H・ロレンスの直観をめぐって——

井 上 義 夫

生きる前に生きるとは何かを問う。書く前に書くとは何かと問う。D・H・ロレンスは、現代の致命的な無惨さがそのようなところに象徴されることを認識した数少ない現代人の一人であったが、彼のこの認識は知性的推論の結果ではなく専ら彼の直観からひき出されたものであった。だが、ロレンスの成し得たところが殆んどその直観に拠るという事実が、ロレンスの生涯が悲劇として現われた事実に照応しているのだということを顧みて知ろうとする人は少ない。ロレンスの生涯の悲劇的な性格は、彼の様々な認識が通常の生からは余りにも隔った次元で、ロレンスに固有な直観によって為されたというところから生まれているのであり、そのような意味では、人はおそらくロレンスの持つ直観の質にかかわらずわぬ方が無難なのであって、T・S・エリオットが当初、彼を信じ難い程の粗雑さで「批評」し排斥しようとしたのも、ロレンスの特殊な直観的認識をそのまま自己の生活のレベルに持込もうとするとき不可避免的に生じる不吉さをエリオットが逸速く予感し、読者からこれを遠ざけようとしたからに他ならないと思える。ここで、ロレンスに固有な直観の質とは、死の世界から生を覗く直観のそれであり、このような質を持つ直観は、生のなかに死を見出す直観とも異なり、また例えば、『カクテル・パーティー』(*The Cocktail Party*)においてエリオットが為したような、予め殺しておいた生を再び生の水準で取り上げる技法を生む精神の働らきとも異なるものなのである。「性」と呼ばれ「愛」と呼ばれ、或いは又「生命」と呼ばれたロレンス文学の諸々のテーマが人々に殆んど理解されていない原因は、ロレンスに固有な直観の質と

これに忠実であったロレンスの余りにも卒直な性情にあると思われる。かつてエリオットは、シェイクスピアの詩よりもダンテの詩を彼が好む所以は、シェイクスピアよりはダンテの方に「生の神秘に対する一層穏健な態度 (a saner attitude)」が見られるからだ⁽¹⁾と書いた。が、ロレンスの場合には、この「生の神秘」を前にしておよそ「態度」などというものをとることができなかったという事情がある。「人間において何か欠けているときにのみ全ては態度になる⁽²⁾」とは、彼の短編『聖モア』(St. Mawr) の中に見出される言葉であるが、この言葉によってロレンスは、生の神秘に駆り立てられ孤独な姿そのままに躍動する彼にとっては「態度」などというものはあり得ないのだと言いたかったのであろう。無論このような在り様は、それ以外にはあり得べくもなかった彼の本質的な在り様であり、ロレンスをロレンスたらしめるものであった。人は誰も、このようなロレンスの在り様に秘められた苛酷さと優しさとをその本来の姿に於て同時に体験することはできないであろうが、かような生存をロレンスに強いた「生の神秘」がロレンスに固有な直観の前にどのように立ち現われたかを明きらかにしないかぎり、ロレンスを理解することは出来ないということだけは確かであると私には思えるのである。

この小論で私は主にロレンスの短篇小説の一つ『プロシア士官』(*The Prussian Officer*) を扱うつもりであるが、この作品は、他のロレンスの作品には見られぬ異質な彼の想像力が見出されるという点で、ロレンスの作品中特異な作品である。しかも、ロレンスが既にこの作品を28才のときに書いていたのだという事実を想起^{たぬ}するとき、自覚された彼の生涯は、死の領域を出て生の領域に踏み入り暫く躊躇い彷徨ったのち再び死の世界へ還って行ったという一連のイメージでしか語れぬもののようにさえ思える。このことは、人間や生物に対する彼の並みはずれた愛情を思えば奇妙ではあるが、この奇妙さの奥に

(1) T.S.Eliot, "Preface to the 1928 Edition", *The Sacred Wood*, Great Britain, 1928, p. x

(2) D.H.Lawrence, *St Mawr and The Virgin and the Gipsy*, Penguin Books, p. 23

実は、ロレンスの内に^{わだか*}蟠る背反の底深さを物語るものが横たわっているように思えるのである。

*

“the shadows that live in the sun” (太陽に住む黒影)

——‘A Young Wife’

“the living darkness of the blood of man” (人間の血の生動する暗黒)

——‘Craving for Spring’

ロレンスの詩や小説には上のような言葉が頻出する。が、この種の言葉の故に、彼の文学の中には通常の意識によって把握し難い部分が残ることにもなる。私達は例えば、ロレンスの言う“Sex”が一般的意味における「性」の問題ではなく、ロレンス自身をはじめ現代に生きる全ての人々の魂の救済という spiritual な問題を含意するものであったことを知ることができる。あるいは又、「生動する暗黒」と語られた言葉は、未だ Life の中に到達していないロレンスによって用いられた表現であり、「新しき世界の、内奥の大陸から流れ出る緑の奔流」と謳われるとき、Lifeはロレンスの最良の直観に沿ったものであることを理解することができる。だが、それらロレンスの本質的なテーマが了解されてさえ、「生動する暗黒」と書いたロレンスの心は解らず、どのような直観が彼にこの言葉を語らせたかは測り難いのである。無論私達に、「生動する暗黒」という類いの言葉を詩作上の一つの暗喩と解する道が残されていないわけではない。しかし、この種の言葉が彼の生涯の死線となったことを知るとき、そのような解釈は不可能となるのであり、更に、そのような立場に立てば、ロレンスが「新しき世界」(new world)と呼び「もう一つの世界」(another world)と呼んだ世界も、言わばロレンスの心の宇宙と言うべき比喩的な架空の世界であったと認めざるを得ない羽目に陥るのである。私には、この困難な問題を解く手がかりをロレンスが『プロシア士官』の中に残したように思えるのである。

この短編は、明きらかに二つの部分に分かれている。前半は、従卒 (orderly) が大尉 (captain) を殺す場面で終り、この従卒が生の世界とも死後の世界とも判然としない世界を彷徨するところから後半が始まる。主要な登場人物は大尉と従卒の二人だけであり、極めて抽象的な設定のもとに書かれた小説である。ロレンスの数多くの小説の中でこのように抽象的な設定は異例であって、このことの内にも既に、この小説のテーマの持つ特異な性格が窺えるように思えるのである。

さて、聳え立つ山並みを前方に見ながら行軍する連隊の中で、大尉は兵士たちから不可避のもの (the inevitable) と怖れられ、大尉も又兵士たちに対し、無関心かつ impersonal な風貌で臨んでいた。この大尉に随き従う従卒は殆んど大尉の顔を正面から見たことさえなく、従って大尉と従卒との関係はただ命令を媒介としたもの、従卒は大尉に黙々と従うものでしかなかった。だがやがて、この二人の間に或る変化が起きる。あるとき、大尉は、緊りつめて固^{かた}くな自己の体に突然温い焔のようなものが這うのに気付く、この従卒の存在に目をとめる。同様に従卒は、火のように赤味を帯びた大尉の青い眼に見据えられるとき、かつて何ものも入りこまなかった彼の魂の奥深くへ何ものかが沈み込んでゆくを感じるのである。このときからのち、二人の間には得体の知れぬ感覚が恒常化し、苛ちと憎悪に媒介された奇妙な相互関係が生まれる。この関係は、従卒が大尉を殺害するまで続くのであるが、ここではまず、これら従卒と大尉がロレンスによってどのように描かれているかを見ておかねばならない。次の二つの文章のうち、前者は大尉について、後者は従卒に関して書かれた文章である。

「大尉の口髭は、短かく刈られ、厚い残忍な口元の上にこわごわと逆立っていた。顔は厳めしく、頬は薄かった。この男はおそらく、顔に刻まれた深い皺と、苛立ったように緊りつめた額のために一層美しく見えたのであろうが、これらのために又、大尉は、生 (life) と闘っている人間のように見えたのである。」

「従卒には、どこか全く若々しく温いところがあった。彼の無表情な黒

い眼は、今までに一度も考えたことがなく、ただ生 (life) を感覚によって直接受け入れ、本能によってすぐさま行動してきたもののようであった。

この眼の上には、くっきりとした眉があった。」

最初の文章から私達は、大尉の風貌に或る種の冷酷さと緊張感とを感じる事ができよう。逆に、従卒に関する文章は、若い肉体の新鮮さのようなものを私達に伝えているようである。これら二つの文章から来る漠然とした印象は、従卒が温かさを、大尉が冷やかさを表わしているということであるが、更に重要なことは、従卒は生を感覚によって直接受け入れ、逆に大尉は life と闘うような風貌の持主であると書かれていることである。次の文章に見られるような従卒に対する大尉の奇妙な苛立ちは、自分とは全く異質なものが大尉の目の前で動いていることから来ているように思える。

「従卒には、どこかのびやかで自足したところがあり、彼の動作には、従卒の存在を大尉に気付かせる何かがあった。そしてまさにそのことが、プロシア人の大尉を苛立たせたのである。大尉は自分の従僕によって生に接触させられることを望まなかったのである (He did not choose to be touched into life by his servant.)。」

上の文章で語られている従卒の「のびやかさ」は、「ほとんど生きていないような (that had become almost unliving) 硬くなってしまった身体」と他の文章で描写されている大尉の身体には見られぬものであり、言わば従卒の身体に現われる「生」そのものが、大尉の側に苛立ちの感情をひき起こすのである。だが、この苛立ちの感情は相互的なのであって、大尉を苛立たせた従卒の側からは、「自然な生まれながらの完全さ」が消え、「かすかな不安 (uneasiness)」がこれにとって替るのである。両者に生まれるこの苛立ちと不安感のために、従卒は大尉との関係から逃れたいと願い、大尉も従卒のために心を乱されたくはないと思う。が、両者の思惑とは別に、この二人を源初より結びつけた関係は存在するのである。次の文章における in spite of himself という言葉は、二人の関係が個人の意志では制御できぬ或る種の宿命のようなものであったことを暗示するものであろう。

「どのようにしてみても (in spite of himself) 大尉は従卒に対する感情の中立性を回復することができなかった。従卒を自由に独りにしておくことができなかった。我知らず (in spite of himself) 大尉は従卒を見つめ、鋭い声で命令し、従卒の時間を取り上げようとしていた。」

「従卒の本能は、大尉との個人的な接触、大尉に対するはっきりとした憎悪を避けようとした。だが意に反して (in spite of himself) 大尉への憎悪は募っていった。」

あたかも、人の思惑を嘲笑う宿命の力がそうさせるかのごとく、大尉の感情は日増しに不安定となり、大尉に対する従卒の憎悪も又募ってゆく。そしてあるとき（不可思議なことであるが）従卒の親指の傷痕が、無関心を装うこの二人を個人的な関係の中にひきずり込むのである。

「従卒の左手の親指には、関節を横切る縫い目のような傷痕があった。

以前から大尉はこの傷痕に苦しみ (suffered from it)、従卒の傷痕を何とかしたいと思っていた。依然として傷痕は、日焼けした若々しい手の上に、醜く残忍に残っていた。とうとう大尉は我慢が出来なくなった。」

大尉は、「その傷痕はどうしたのだ」と従卒に私的な質問をするのであるが、このときからのち、従卒を避けようとした大尉の感情は、逆に、従卒と接触したいという欲望に変わる。そしてこの欲望は、黙契を踏み破った自らの大胆さに促されて、次の文章に窺えるような常軌を逸した狂気じみた衝動にまで昇まってゆくのである。

「あるとき大尉は、重い軍用手袋を従卒の顔めがけて投げつけた。そのとき大尉は、従卒の黒い眼が大尉の眼に向かって燃えあがり、焰の中に投げられた薬のように焰立つのを見て満足感を味わった。大尉は、かすかに震えながら嘲り笑った。」

これは、二人の間に何ものかが通じ合い、二人が何ものかによって結びつけられた最初の場面なのであるが、大尉はこのような場合に底知れぬ満足感を味わうのである。同様なことは、彼が何日かの後、従卒の顔をベルトで殴りつけ、従卒の太股を蹴り上げる場合にも当てはまるのであるが、大尉は、このような

振舞いが自らの手で為された事実を認めようとはしない。すなわち彼は、意識の上では平静を装おうとするのである。だが、心の奥底では逆に、深い歓びに続き反動の懊悩に見舞れるという具合に、大尉は激しく動揺し、彼の内の何ものが崩れ始めるのである。しかしながら、自らの行為によって受けた大尉の衝撃は、従卒の側に起きた崩壊現象に較べれば微々たるものであったといえることができる。従卒は、大尉との関係にひきずり込まれたことによって、何ものかに圧倒されたような虚脱状態に陥ってしまうのである。

「従卒の口は、痴呆のように、だらんと開いていた。彼は、荒廃し、虚ろになってしまったように感じた。……手足や顎は弛緩し、生気を失ったようであった。非常に疲れていたが、やっとのことで床につき、ぐったりとして泥のように眠った。それは睡眠というより、虚脱状態というべきものであった。従卒は懊悩の微光に射抜かれ、脱殻^{ぬけがら}のように死んだ夜を過ごした。」

従卒のこのような変化は、二人の関係の本質的な姿を或る程度まで明るみに出してくれるものである。即ち、大尉が自らの望み通りに振舞い、従卒に対して加虐的な歓びを感じたとき、従卒が逆に自己本来の潑刺とした自由な存在を喪ったという事実から、私達は、この両者が各々の在り様を貫こうとすれば互いに他の存在を否定しなければならないような位置関係にあるのだということを推測できるのである。一方が存在するとすれば、他方は存在し得ないのである。次のごとき文章はその証左となろう。

「士官は、蒼白く重々しく、テーブルのところに座っていた。従卒は挨拶をするとき、自分の存在が消滅してしまうような気がした。従卒は、しばらく、自らの無滅状態に屈して黙って座っていたが、そのうちに気を取り直し、再び自己を取り戻したように思った。すると大尉は、ぼんやりと実体を失ったものようになり (grow vague, unreal)、従卒の心臓は大きく脈打った。彼はこのような状態にしがみついた。彼自身が生きられるように、大尉は存在しないのだと従卒は考えた。」

だがこのような状態はすぐに止まってしまう。両者の関係に於て、実在感を喪

失する運命にあるのは従卒の方なのである。従卒は再び「空の貝殻のように空虚」になり、「肉体のない魂」のような自己を感じる。彼は、「日光の下を這う影」すなわち「無」のごとき存在となるのであり、従卒が非存在となったこのような状態は物語の最後まで続く。ただ一度、彼が大尉を殺害する直前にこの状態は消え、逆に、大尉の方が非現実となる瞬間があるが、殺害後は従卒の空白感は一層甚だしいものとなるのである。両者の位置が逆転する殺害直前の従卒の状態を、ロレンスは、「従卒の内部には徐々に或る芯のようなものが固まり、この中に若々しい生 (life) の全てが凝縮された。いま彼は、自らの内に奇妙な力の塊を持ったのである。」と書いている。内部に蓄積されたこのエネルギーのままに、従卒は大尉にとびかかり、歓喜しながら大尉を殺す。だが彼は、大尉の死を確かめたとき、深い安堵感とは別に、次の文章に窺えるような或る後悔に見舞れるのである。

「ゆっくりと従卒は立ち上がった。大尉の身体は、ひきつったまま、動かないで、そこに伸びていた。従卒は立ったまま、黙ってそれを見た。それが壊れてしまったことは哀れなことであった。それは、彼を足蹴にし威したものの以上のものを象徴していたのである。(It represented more than the thing which had kicked and bullied him.)」(傍点作者——井上註)

屍体を眼の前にした従卒に訪れた後悔は、従卒に対する大尉の存在のかけがえのなさに起因するものであると思える。この大尉の存在が従卒にとってどれほど大きな意味を有するものであったかは、「従卒はしばらくの間屍体のそばに坐っていた。ここで、従卒の生 (life) も又終ったのである。」という文章によっても明白である。だが、従卒がまだ生きている以上、物語の前半の終りを告げるこの文章は奇妙な文章であると言わねばならない。そしてこの奇怪さは、この文章の中の life という語に「人生」や「生活」というような訳語を充用しても解消しないのである。

というのも、この小説自体がそもそも不可思議なのである。既に述べた従卒の親指の傷痕はその内の一つであり、この小論で言及できるものもごく僅かに

しか過ぎないが、『プロシア士官』の中には数多くの奇妙な箇所が見出されるのである。が、この奇妙さは同時に、或る一貫した意図に貫かれたものであり、私には、この奇怪さを或る一つの指針の下に辿ってゆけば、ロレンスが故意に隠した一つの結論が明かされるように思えるのである。すなわち、先に引用した文章の *represent* という語に注目し、物語の中の具体的な物象、諸々の人物を何ものかの象徴と解することによって、この小説の内容展開の下層にもう一つの意味展開を読みとるとき、物語全体に流れる漠たる奇怪さは立ち消えるのである。ロレンスも又、あたかもこの小説の謎を解く鍵を読者に提供するかのごとく、物語の最後に（しかもただ一度だけ）次のような文章によって従卒と大尉を第三者の前に登場させているのである。

「3時間後に兵士達が従卒を見つけたとき、従卒は腕に顔をのせ横たわり、その黒い髪は太陽の下で熱を放っていた。彼はまだ生きていた。開いた黒い従卒の口を見て、若い兵士達は恐怖のため、運んでいた従卒を落としてしまった。

従卒は夜、再び陽を見ないで、病院で死んだ。……

二人の身体は、屍体安置室に並んで (*side by side*) 横たえられた。一方は繊細で白かったが、硬直したまま静かに横たわっており、他方の身体は、いまにも眠りから醒め、再び生 (*life*) に戻りそうに見えるほど、若々しく新鮮であった。」

若い兵士達が従卒の「黒い口」を見て何故「恐怖」に打たれたかは依然として謎めいていよう。だがいま、従卒と大尉を何ものかの象徴として理解するという立場に立てば、上の文章の中の「今にも眠りから醒め再び生に戻りそうに見えるほど」という一節によっても、私達は従卒の象徴するものが「生」(*life*) であることを大した困難なしに理解できよう。他方、この従卒の屍体と「並べて」置かれた大尉が、生を支配する「不可避のもの」、すなわち「生」の対概念とも言うべき「死」の象徴であることも、同様に理解される筈である。この物語の最初に従卒を描いたロレンスの文章は「温かさ」を強調するものであり、逆に、大尉を描いたそれは「冷やかさ」を強調するのであった。「温かさ」

は「生」につながり、「冷やかさ」は「死」につながるものであることから、これら両者の象徴するところにさして不思議はない。大尉は「死」の象徴、従卒は「生」の象徴なのであるが、それでは、大尉が死んだとき従卒の life も又終わったとはどういう意味なのであろう。更に、従卒が影のごとく虚ろであり、従卒が大尉に比してより real であったのは大尉を殺す直前であったということは何を意味するのであろうか。私達は以前にもまして奇妙な問題に直面しており、この問題については一つの暗礁にのり上げるように見える。そして、この奇怪さは、大尉を殺した従卒に或る変化が生じてからのち、一層甚だしいものとなるのではあるが、同時にまたその奇怪さの故に、私達を一つの結論へと導いてくれるものなのである。

「従卒は、その場から（大尉を殺した場所から——井上註）去らねばならないと思った。彼は立ち上がった。木の葉が陽光に輝き、木の破片が地面から反射してくる光で白く光っていたので、従卒は驚いた。何故なら、彼にとっては世界は悉く変化していたのに、他のものにとってはそうではなかったからだ。あたりは以前と全く同じように思えた。彼一人が、そこを去ってしまったのだ。……彼ら兵士達は、広漠とした谷間の陽光のなかで、小さな群れをなして働いていた。……白い尖塔の教会と村が陽の光に小さく輝いていた。従卒はもはやそこに属してはいなかった。従卒は、兵士達から離れた遠く暗い彼方の闇に居る一人の人間のように坐っていた。彼は、日常の生 (life) から脱け出て未知の世界 (the unknown) に来てしまったのであり、以前彼のいた世界には戻れはしないし、また戻ろうとも思わなかった。」

この従卒に起きた変化とは、彼独りが生の領域から the unknown の領域に踏み込んでしまったということであろう。だが、「以前彼のいた世界」とは異なるこの the unknown の世界とはどのような世界なのであろうか。この世界に明確な名辞を与えずただ the unknown とだけ書いた作者自身は、この世界をどのような世界と看做していたのであろう。私達はここで、上の文章の中の「暗闇」と「陽光」という言葉に注目しなければならない。何故なら、「光」

と「影」も又「生」と「死」を暗示する言葉であるからであって、これらの言葉は象徴として解するとき、この物語は新しい眺望の下に出現することになるからである。ロレンスの作品には、「暗闇」が死を暗示し、「光」が生を暗示する場面が数多く見出されるのである。

「ポールはもはや、あの方向には進もうとはしなかった。母親を追い、闇 (darkness) に向かって進もうとはしなかった。かすかにさざめき輝く⁽³⁾ 街に、彼は足早に歩いていった。」

ロレンスは、『プロシア士官』と同じ頃書かれた『恋しい息子たち』 (*Sons and Lovers*) を上のような文章で閉じていた。ここで語られている闇が、ポールの母親を呑んだ死の闇であることは明らかであり、逆に、人々の住まう「街」が「輝く」という語で修飾されているところから、光は生を暗示するものでもあり、光は生を暗示するものでもあり、明白である。先の引用文中、兵士達が谷間の「陽光」のなかに在り、「白い」尖塔の教会が「陽の光に輝いていた」と書かれているのは、兵士達や教会や村が生領域にあり、他方、「暗闇」に座しているような従卒が死領域に入ったことを示すものなのである。そのことは、大尉を殺害する直前の従卒について書かれた文章、すなわち「時々従卒の眼の前は暗くなった。あたかもいぶされたガラスを通してこの世界を見るように、世界はか細い影の集まり、現実味のないもののように見えた。」という文章においても同様なのである。太陽に灼かれている筈の眩い世界で暗い (dark) 色調が支配的となるのは、斯界がその現実性を喪失し、これに替って死の世界が浮び上がってくるということであり、この両者の交替が完成されるとき、従卒の属する世界は、彼の視覚に対し、「黒」 (black) 一色の世界として現れるのである。「従卒は、重々しい黒い布きれのような縦の木を仰ぎ見た。やがて全てのものが真黒になった。彼には、自分の方で眼を閉じたのだとは思えなかった。事実、従卒は眼を閉じなかったのである。」というような、大尉を殺した後の従卒に関する一見不可思議な文章も、従卒が生きながら死の世界に入りこんでしまったことを物語るものなのである。

(3) *id. Sons and Lovers*, Penguin Books, p. 511

今や、この由知らぬ世界における従卒の在り様は、「嘔吐感と病熱の完全な錯乱状態」(the mere delirium of sickness and fever) に等しいものであり、事実彼は、暗闇に浮ぶ死んだ筈の大尉の血まみれの顔を見さえする。それ故、病夢にも似た従卒のこの錯乱にかかずらうことは無益なことであると思われるかも知れない。しかしながら、この「錯乱」の状態は、自らの直観を最後まで断言しないときに初期のロレンスが用いた常套手段とも言い得べきもののなのであって、例えば、この作品と同じ頃に書かれた『侵犯者』(*The Tresspasser*) の中で、生の暗黒を垣間見たシグモンドは狂おしい生理的な発作の果てに自殺したという風に書かれているのである。⁽⁴⁾つまり、ロレンスはこれらの作品の中で、通常の意識ではおよそ信じ難い彼の認識を扱っているのであるが、ただこれを断言しようとはしないのである。逆に言えば、断言できぬからこそ『プロシア士官』のごとき抽象的状況を設け、「光」や「暗闇」、「従卒」や「大尉」その他諸々のシンボルに頼らざるを得なかったのである。

さて、大尉を殺した直後に木の葉が「陽光」の中にきらめいているのを認めた従卒の「驚き」は、彼だけが変化したこと起因する「驚き」であった。すなわち、従卒が死んだとすれば、彼は以前とは異なった世界に来ている筈であり、他方、世界が以前の生の世界であるとすれば、彼はまだ生きている筈なのである。が、この従卒にとっては彼と世界との関係はそのいずれでもない。依然として彼の周囲には陽にきらめく木の葉があり、しかも彼自身は以前の彼ではない。その証拠に、従卒の内部に残った現実感はいま「吐き気」(sickness) だけなのである。だが、この嘔吐感は生理的な次元の嘔吐感ではあるまい。ある人間が、人の常態に於ては把捉できぬ異質の秩序、異形の世界に直面したとき、異界の放つ不気味さはまず嘔吐感として当の人間に知覚されるということであろう。従卒の嘔吐感が外部の世界そのものから来ていることは、「胸のむかつくような大きな鼓動が、あたかも全地の中を脈打つように、彼自身の中で脈打っていた。」というような文章によっても暗示されているのである。それ故、従卒が外部の世界を注視し始めるときには、「恐怖」が彼の嘔吐感に替ることになるのである。そして、従卒のこの恐怖感は次のような場面ではその極

点に達するのであり、この奇怪な恐怖の絶頂においてはじめて、従卒も私達も、故知れぬ恐怖を異界に放つものが何であるかを理解する手がかりを与えられることになるのである。

「従卒は野りすたちに話しかけたいと思った。だが、彼の喉から出たのは唖れた音だけであった。野りすたちは一斉に駆け出して木を駆け登っていった。しばらくして、木の幹を半ば登ったところで一匹の野りすが彼の方に向き直り、彼を見つめているのが見えた。従卒は恐怖に打たれた。意識している限りでは、彼は愉しかったのであるが……。それはなおもそこにいた。木の幹の中間に、従卒を見つめている小さな鋭い顔や逆立った耳、樹皮にしがみついている瓜の生えた小さな手や、白い胸が見えた。従卒は仰天して駆け出した。(He started from it in panic.)」

だが一体なぜ、従卒は恐怖に襲われたのであろう。従卒の意識に対しては愉し気な印象を与えた筈のこの野りすは、何故彼を恐怖の底に落とし入れたのであろうか。私には、ここに、ロレンスの源初的な直観がどのようなものであったかを理解する鍵があるように思える。次の文章は、『プロシア士官』の書かれた時期を回想したロレンス自身の言葉である。

「その年、私にとって全ゆるものが崩壊した。死の神秘と、生にまといつく死 (the haunting of death in life) を除いて、あらゆるものが、ことごとく皆崩れ去ったのである。」⁽⁵⁾

この言葉は比喩ではない。或いは、単にロレンスの個人的略歴を物語る言葉でもない。the haunting of death in life とは、彼の直観の内容を物語る言葉なのである。

この従卒は、生死の境の判然とせぬ奇妙な世界に入っ^てのち^はじ^めて、「これは生なのだろうか、それとも生ではないのだろうか」(Was it life, or not life?) と自らに問うていたのであった。ぼんやりとこのように問うていた従卒が座り直してみると、何ものかが彼の眼の前を通りすぎて行ったのであり、従卒は、跳びはねている野りすを見て喜んだのである。だが、この野りすが木の

(4) *id. The Tresspasser*, Penguin Books, p. 188

上に駆け上がり、従卒の方を見ているのに気付いたとき、従卒は恐怖に打たれた。何故なら、彼自身の問いに対する予想もしなかった解答が、従卒を見つめている野りすによって、一挙に従卒の臍ろな意識の奥底にもたらされたからである。すなわち、木の上に駆け登った野りすは急に静止したのであり、静止して彼を見つめる野りすは、逆に、野りすは動いていたのだという印象を従卒に与えたのである。野りすが動いたとすれば、世界は生の世界であり、従卒も又生きている筈である。が、従卒は以前の生の中にはいない。であるとすれば、世界も又死の世界であると考え他ないであろう。だが死の世界で野りすは動いた。つまり、死んでいるものも又動くのである。逆に言えば、生きているものも既に、死んでいるのである。従卒を襲った panic とは、私にはこの直観の恐怖であったように思える。野りすの中で一体となったものは生と死であり、従卒を見つめる野りすに彼が認めたものは、死が、生きている野りすの眼によって彼を覗いているという事実そのものだったのである。

このことは、従卒に恐怖をもたらすものが、後に、「木の蔭から覗き込む大きな眼をした何ものか」(something with great eyes that stared round a tree) というような言葉で言い替えられることから確証される。更には又、生きている大尉と従卒との関係に於て既に、ロレンスが次のような文章によってこの生と死の究極の関係を暗示していたことをも、私達は理解できるのである。

「突如、従卒の前の色鮮やかな蜃気楼の中に滑り込んできたものがあった。……確固として誇り高く、馬上の大尉は進んできた。他のものの上には、か細く輝く影を投げている今朝の光が、この素早いきらきらした姿の上に (on the quick, bright thing) すべて集中されたのであった。」

この文章にあっては、「生」を暗示する「光」は、「死」の象徴である大尉に言わば意図的に凝縮されている。馬上の大尉に全ゆる光が集中し、逆に、この大尉を除いた全てのものの上に、朝の光がか細く光る影を置くに過ぎないということは、「光」と「影」で暗示される通常の「生」と「死」の関係が全く逆転されていることを意味するであろう。「素早いきらきらしたもの」という言

葉によって明きらかなように、ここでは、「死」は「生」本来の属性を身にまといっているのである。もはや、死は生の影でも生の回りにつきまとう実体でもない。死とは生そのもののこと、生とは、地上に現出した死そのもののことなのである。

今や私達は、従卒を発見した兵士達の謎めいた「恐怖」にも明確な意味を与えることができよう。生きて[・]いる[・]筈[・]の[・]従卒[・]の「黒い口」を見て、「若い兵士達は恐怖の為、運んでいた従卒を落としてしまった」のであるが、彼ら兵士達の「恐怖」は、野りすを見た従卒の恐怖と同じものなのである。すなわち、「黒」の暗示するものは「死」であり、彼らが従卒の「黒い口」に見出したものも、生として地上に現われた死の姿そのものなのである。同様に、従卒の親指の傷痕の持つ意味も容易に理解される筈である。若い従卒の傷痕は、生の只中に現出した死の痕跡であり、生の中に死が存在することの象徴である。ロレンスは、この若者の傷痕を大尉に見せ、無意識の内にひかれつつも反発し合う奇妙な関係をつくり出したのであった。この関係の推移はそれ故、「死」が徐々に「生」を呑んでゆく過程でもあったのであり、大尉の殺害と時を同じくして従卒の life が終わったのも、従卒と大尉が本来的に同一のものであるからに他ならないのである。

かくて、ロレンスの源初的な直観とは、「生」は「死」の架空の名称であり、「死」が生きているとき、人はそれを「生」と呼び慣わすのだという直観であったように思える。だが、ロレンスが従卒と大尉の関係において、従卒すなわち「生」を影のごとく空虚なものとして描いたことは、彼が「生」よりも「死」に或る種の potency を見出していたことを物語るものであろう。物語の最初から、master は大尉であり、従卒は servant であった。そして、この従卒の「魂と身体に大いなる焰がめらめらと燃え上がり」不可思議なエネルギーのままに従卒が大尉を殺害したのは、両者の関係に生じた一瞬の変化でしかなかったのである。私には、この変化をもたらしたのは、従卒の内部に蓄積された「生」のエネルギーではなく、逆に、永遠の「生命」を宿す「死」の権能であったように思える。『白い孔雀』(The White Peacock) の中で、レティは次の

ような言葉を口にしているのである。

「この人生 (life) で花開く前に、あなたはまず苦しまねばならないのよ。

死が丁度植物に触れているとき、植物はね、開花する情熱でたぎるものな
(6)
の。」

即ち、生を生として燃え立たせるものは、生に内在する生命力ではない。逆に、死の権能が、この生をして大いなる燃焼に駆り立てるのである。同様なことを、『侵犯者』のシグモンドは次のように語っている。

「死の薪の上で私が燃えるとき、私自らであるこの光でさえ、私の眼を眩ませて、この焰の生まれるところ、この焰の消えゆく先を、私から隠すことはできない。生は暗黒の表面を燃すもの、しかるのち再び、暗黒に消えゆくもの……。」
(7)

生は死に帰属し、死の闇の表面^{うわべ}に燃え、再び暗黒に還る焰なのである。シグモンドは、しかも、この焰は見えない (invisible) のだとも語っているのである。

だが、この見えぬ焰の燃え立つ世界に、死とも生とも言い難い「生命^{いのち}」を享けた人間が、死の影すら時たまにしか射さぬ人の世に棲まうとき、他の人間と彼との関係は一体どのようなものとなるのであろう。奇妙な直観のもたらした恐怖のあとで、従卒が木蔭から一人の女を見る場面を、ロレンスは次のように記していた。

「女は彼から遠ざかっていった。従卒には、彼女に話しかける言葉がなかったのである。彼女は、明るく輝く一個の非現実 (unreality) であった。彼女は、従卒を困惑させる騒音に似た言葉を喋り散らすであろう。彼を見ながら、しかも彼を認めることはなかったであろう。」

この文章は、私達に、ロレンスの最後の小説『死んだ男』 (*The Man Who Died*) を思い出させる。人間との「接触」 (contact) という問題が、ロレンス

(5) *id. The Complete Poems of D.H. Lawrence*, Heinemann, 1964 vol. 2, p. 851

(6) *id. The White Peacock*, Penguin Books, p. 42

(7) *id. The Tresspasser*, p. 136

にとって、想像を絶するほど困難な苦悩を伴う問題として立ち現われた根拠は、いまこの従卒に即して言えば、彼が「人間」との間に共有すべきものを悉く喪失してしまい、彼にとっての **reality** が通常の存在場所を離れて彼方の地に飛び移ってしまったということにあらう。即ち、この従卒が現実[・]に帰属するところは死の世界なのであるが、未だ死んではない彼が渴望する **reality** は、この死界にも存在しないのである。この物語の最後近く、従卒が彼に残された激しい「渇き」(**thirst**) の癒される場所を求め、「天と地の間に浮ぶ」「奇蹟の光 (**a wonder-light**) に輝く山並みを見た」のは、死界に生きる従卒が、人間の世で人々と共有できる人と彼との新しき **reality** を(即ちロレンスの言う **newness** を)求めたということであらう。従卒の「渇き」は「新生」への渴望であり、この物語の結末によってロレンスは、従卒と彼自らの生の蘇りを象徴したかったのだ、と私は読む。私には、ロレンスが終生この奇蹟の光に輝く山並みを求め、あるときこの **newness** を「性」の中に見出したと思えるのであるが、蘇生へのロレンスの渴望にもかかわらず、ロレンスの「性」にどれほど濃い死の影が落ち、彼の救済がいかほど「死」の安息に結びついていたかについては、ここに触れる余裕はない。それらは、いずれまた稿を改めて述べねばならぬ大きな問題なのであるが、いずれにせよ、ロレンス文学に固有な「生動する暗黒」というような言葉は、「生」と「死」の重なり合うロレンスの特異な体験から生まれた言葉なのであって、私達は、ロレンス文学における「性」あるいは「愛」のテーマを、このような体験を背後に宿したものとして身を受け、その奥深くに流れるロレンスの魂の音律を聴きとってゆかねばならないのである。